

# ビザンツ政治史考

## —— 9世紀アモリア朝について ——

中 谷 功 治

(西洋史学研究室)

### はじめに

本稿は、内容はともかく体裁において通常の論文の形式をとっていない。その理由は、目的を定説を覆すような新しい議論の展開にではなく、8世紀のビザンツを主な対象としたこれまでの考察を踏まえ、続く9世紀の政治史について一応の見通しを立てることに設定しているからである。

以上のような理由から、研究史には原則として触れない。ただし、本稿を執筆するに際しては、W・トレッドゴールドの一連の研究とF・ヴィンケルマンのプロソポグラフィ研究が欠かせぬものであることは申し述べておく<sup>(1)</sup>。

また最近、小林功氏が9世紀について独自の研究論文を発表している<sup>(2)</sup>。実を言えば、以下での議論はこの小林論文を出発点としている。本稿のもう一つの目的は、9世紀の皇帝政権について小林氏とは異なる像を提示することにある。

当然、小林論文と視角や解釈における違いは大きいだが、内容面では重複する点が多く、登場する人物名などもほとんど同じである。そこで、注についても可能なかぎり簡略化し、小林論文に提示がある場合にはそちらに譲ることにした。また、小林氏の記述への反論は、本文での議論の流れの妨げとならないよう、できるかぎり注の部分に集めるよう心掛けた。以下、引用箇所は小林論文から、カッコ内の数字はその頁・行数を示す。

### 1 使用する概念について

本稿は一応独立した形で書かれているが、小林論文と対比しつつ読む場合を想定して、使用する概念の違いについて最初に説明しておきたい。

まず、小林氏が用いる「高官や高位保持者たち」high-ranking officials という用語の意味内容について。氏は、この「高官・高位保持者」という用語を「中央行政機構の中枢にある人々」(119/15)と定義する。そして、「中央にいる高位保持者たちのほとんどは高官であった」(120/1)という。肝心なのは、彼らを首都において一定の利害をもつまとまった社会階層、と捉えている点にある。8世紀末頃の史料に「家門名をもつ高官たちが出現する」(120/5)のものが、その証拠だという<sup>(3)</sup>。

以上の「首都の高官・高位保持者」に対応する概念として、地方の「テマ（軍団）の幹部」 provincial elites (143/17)（類似表現多数）という用語が用いられる。彼らは地方に基盤（＝大土地所有）をもつ有力家門だという。「テマの指導層」（127/10）という表現からも明らかなように、彼らもまた利害を同じくする社会階層と規定されるのである<sup>(4)</sup>。

実は「首都の高官」という表現を先に用いたのは私である。ただし、おなじ用語でも中味の方は異なっている。私の「高官」には、文官と武官の区別は存在しない。当時の呼称をもとにした実体概念として、高い爵位やそれに見合う官職を持つ者たちはみな「高官」とみなす（当然のことながら「元老院」議員にもなる）。

というのも、軍隊について「テマの幹部」とはいうものの、以下に見るように、史料上の制約から、実際には長官ストラテゴスやごく一部の師団長トゥルマルケス<sup>(5)</sup>しか確認できないからである。しかも、彼らの多くは8世紀後半にやはり名字や異名をもって史料に登場し始める。もちろん爵位においても、彼らは「首都の高官・高位保持者たち」とまったく遜色はない。

小林氏自身も注の中で認めているように、「8～9世紀の高官や官位保持者たちの経済的基盤に関しては資料がきわめて断片的で、包括的な研究はまだなされていない」（121/注5）。これは、プロソポグラフィ情報を駆使したヴィンケルマンの基礎研究をもつての結論であり、よって「包括的な研究」を待たず、経済的背景を軽視して社会階層を設定するのはかなり乱暴である。小林氏は「社会的背景」（137/10, *passim*）という、曖昧なことばを用いて問題を回避しようとしているが、実質的には同じことであろう。「8世紀末以降、高官たちは次第に独自性を強めつつあった」（144/11）という際の、「独自性」とは具体的には何を指すのだろうか。

以上の理由から、私はテマの長官も政府の閣僚も同様に「高官」として処理する。以下混乱を避けるため、「高位保持者」という用語を伴う場合は小林氏の表現、カッコのない高官は中谷の用語と御理解いただきたい。

他にも注意を要する概念がいくつかある。小林氏が用いる「皇帝権力」 imperial authority という用語は、「皇帝個人の政治への発言力」と読み替えて大差はないようである（「皇帝政権」と読める場合もある）。残念ながら、この用語から受けるイメージは私の場合とはかなり異なるので、誤解を避けるため本稿では引用部分を除いて使用をできるだけ控えることにする。

また、普通名詞ながら小林論文では、特定の皇帝の「発言力」「指導力」「裁量権」がキーワードとして登場する。常識的には、皇帝自身の「発言力」は君主としての経験や才能などの個人的資質に左右されると予想されるのだが、小林論文での扱いはこれとは異なるようにも読める。それだけに、その実態や変化についてある程度の説明や区別が明確にされてしかるべきである。

さらに、より専門的な重要概念「ネットワーク」「社会的結合」についても、詳しい定義や内容説明はなされていないに等しい。例えば「ネットワーク」なるものの機能性や有効性が具体的に検証されることもない。そもそも、建前上超越的な権力者とされる皇帝を中心に張りめぐらされる関係を「ネットワーク」と呼ぶべきかどうか。目下流行中のインターネットのような、より対等で双方向的な「ネットワーク」のイメージで接すると強い違和感を感じてしまう。ともかく、皇帝個人による「ネットワーク」と「社会的結合」が帝国統治上でいかに機能したのかが小林論文の核心であるだけに、重大である。

本稿において研究の対象となるのは、9世紀の一般に「アモリア王朝」と呼ばれる時代（820－867年）のビザンツ帝国である。この時期の帝国において王朝観念がどの程度成長していたかは議論の余地があり、私もこの呼称を好むものではないが、ここではミカエル2世・テオフィロ

ス・ミカエル3世の3代の皇帝の時代を指す便宜的な呼び方として御了承願いたい。

なお参考のため、関連する時期の主な皇帝や帝位僭称者について表1、小アジア地方に分散する6つの軍団（テマ）と9世紀以降に中央軍を構成する4つの近衛連隊（タグマ）のリスト、ならびに帝国の主な爵位序列を表2に示しておく。

前置きが長くなったが、8世紀のまとめから始めることにする。

【表1】

皇帝（篡奪者）名	統治年数-最期	即位前の地位
<8世紀>		
※ユスティニアノス2世（再位）	6 篡奪	皇帝の子
※フィリップコス=バルダネス	2 殺害	高官・遠征軍司令官
※アナスタスオス2世	2 篡奪	政府高官
※テオドシオス3世	2 篡奪	皇帝の子？
※レオン3世	24 ○	テマ長官（テマの支持）
×アルタヴァストス	1 殺害	テマ長官（テマの支持）
△コンスタンティノス5世	33 ○	皇帝の子（テマの支持）
レオン4世	5 ○	皇帝の子（テマの支持）
エイレーネー（摂政）	10 篡奪	皇帝の母（高官の支持）
△コンスタンティノス6世（単独）	7 篡奪	皇帝の子（テマの支持）
△エイレーネー（単独）	5 篡奪	皇帝の母（高官の支持）
<9世紀>		
※ニケフォロス1世	9 戦死	政府閣僚（高官の支持）
×バルダネス=トゥルコス	隠遁	テマ長官（テマの支持）
スタウラキオス	0 戦死★	皇帝の子
△ミカエル1世	2 篡奪	皇帝の婿（高官の支持）
※レオン5世	7 殺害	テマ長官（テマの支持）
※ミカエル2世	9 ○	近衛連隊長
×トマス	殺害	テマ師団長（テマの支持）
テオフィロス	13 ○	皇帝の子
テオドラ（摂政）	14 篡奪	皇帝の母
△ミカエル3世（単独）	11 殺害	皇帝の子
※バシレイオス1世	19 ○	皇帝の側近

※：篡奪帝 ×：篡奪を図ったが失敗した者 ★：戦場で受けたけががもとで死亡  
△：皇帝一族ながら、帝位移譲がスムーズでなく、これを奪取した者 ○：病死

【表2】

<9世紀初頭の小アジアの軍団テマと首都の近衛連隊タグマ>	
アナトリコイ	スコライ
アルメニアコイ	エクスクピテス
トラケシオイ	ビグラ
オブシキオン	ヒカナトイ
ブケラリオイ（8世紀後半より）	
キビュライオタイ（海のテマ）	

<主な爵位の序列>（9世紀末）～昇順～

→スパタロカンディダトス→プロトスパタリオス→パトリキオス→○→  
→マギストロス→○→○→○→カイサル（副帝）

## 2 8世紀のビザンツ帝国とテマ<sup>(6)</sup>

8世紀のビザンツ帝国を政治史から一言で表現するなら、それはテマの時代であった。政権の成立や崩壊には、例外なくテマ（主に小アジアの6軍団：表2参照）が関与していた。実際、7世紀末からはテマによって次々と皇帝の首がすげ替えられた。時を同じくしてイスラムの軍勢が首都コンスタンティノープルへと迫り、国家滅亡の危機は頂点に達した<sup>(7)</sup>。

政治混乱の中、帝位に就いたのはアナトリコイの長官レオン3世である。彼は盟友であるアルメニアコイの長官アルタヴァスドスと協力し、小アジアのテマを糾合する形で政権を樹立した。イスラムの首都攻囲もテマの連合軍によって撃退された。詳しいことはわかっていないが、レオン3世治下の帝国はテマ連合政権と呼ぶにふさわしい。あれほど頻発していたテマ反乱が、以後急速に終息したのがその何よりの証拠である。

次にテマ反乱が起こったのは、レオンの跡目をめぐってであった。レオンの娘婿アルタヴァスドスと息子コンスタンティノスとは、小アジアのテマを二分して激しい内戦を繰り広げた。そして、最終的な勝利を納めたコンスタンティノス5世の政権も、やはりテマに強く支持されたものであった。彼が先頭に立って小アジアのテマ連合軍を率い、ブルガリアに何度も遠征しているのは象徴的である。

確かに、彼によってテマ=オプシキオンは分割されるが、これは内乱との関連で理解する必要がある（アルタヴァスドスを支持した）。このテマの二分は、後のテマの体制内化＝「テマの改革」の嚆矢ではあるが、バルカン半島での新設を除けば、次に小アジアの大テマが分割されるには9世紀初頭の大規模なテマ反乱の終結を待たねばならなかった。同様に、スコライ・エクスタピテスという二つの近衛連隊（タグマ）の増強も確かに「テマ改革」につながる要素を含んでいるが、コンスタンティノスにとって当初のタグマは、テマ軍団から選抜された自身の親衛隊にすぎなかった<sup>(8)</sup>。

コンスタンティノス5世の長男レオン4世も、政権基盤の安定のためにテマを利用している。病弱な彼は親征はできなかったが、それでもテマ連合軍の活躍が父の時代と同様に確認できるのである。

事態の変化は、レオン4世が幼い息子コンスタンティノス6世を残して早世したことから始まった。新帝の母、摂政のエイレーネーがこれまでとは違う政治を始めたのである。イコンの復活もその一つであるが、彼女は政府高官に宦官たちを起用して政治の実務を委ねた。テマの長官には首都から彼女の意を受けた人物が送り込まれ、テマ軍による遠征にも皇帝の名代として上述の宦官たちが派遣される。さらに「テマの改革」として、近衛連隊の再編も進められた。

人一倍権勢欲の強い母に対して、成人した息子を支持したのが小アジアのテマであった。将兵たちは母の任命した長官たちを解任し、首都近郊へ出撃して圧力をかけた結果、晴れてコンスタンティノス6世は国政の舵取りに乗り出すことになった。けれども、宮廷育ちの4代目にはテマの全軍を指揮する才能や経験が欠落していた。大敗を喫して自信を喪失した息子は、母親や宦官たちと和解する。それでもなおエイレーネーに反抗するテマ勢力を皇帝は自ら出陣して鎮定したが、孤立して母親の陰謀の前に視力を奪われた。

こうして、ビザンティン史上初の女帝エイレーネーが誕生したのだが、内外ともに政治は動揺し、税務長官ニケフォロスを擁立する首都の高官たちによって彼女は間もなく帝位を追われた。このニケフォロス1世に対し、ただちに小アジアの大半のテマが反乱を起こした。反乱の頭目ア

ナトリコイ長官のバルダネス=トゥルコスが首都対岸に迫ったが、城門は彼に開かれることはなかった。バルダネスの腹心であるレオン（後の5世）やミカエル（後の2世）の裏切りや、首謀者であるバルダネス自身の戦線離脱により反乱は瓦解する。

一世紀ぶりに首都勢力によって誕生したニケフォロス政権は、基本的にはエイレーネーの政策を継承した。戸口調査の厳格な実施など税務に通じた彼の施策は、中央集権的な国家を目指して強硬に押し進められた。ただし、新たな近衛連隊の創設が確認できるものの、小アジアのテーマに対する改革は確認できない。むしろ、彼の重点はバルカン半島を含む帝国西方にあり、この地域でのテーマの新設や強制移住策が特記される<sup>(9)</sup>。また、彼は「テーマの連合軍を率いて戦う」というテーマの将兵の理想の皇帝像を求め、しばしば親征を敢行した（この理念は以後半世紀にわたり継承される）<sup>(10)</sup>。

しかし、811年、大軍によりブルガリアの首都プリスカを陥落させながら、帰路で待ち伏せに遭って帝国軍は壊滅、ニケフォロスは戦死する。後継者の息子スタウラキオスも深手を負い、その後首都で没する。ブルガリア軍の脅威が増大する中、帝位を継承したミカエル1世は取り巻きたちの助言に翻弄され、勝手に戦線離脱してアナトリコイの長官レオン（5世）に全軍の指揮を委ね、ブルガリア軍が迫ると今度は帝位をも彼に差し出したのである。

以上まとめておく。政治的混乱と対外的危機によって、8世紀は地方テーマの軍事力を背景とした政権が構築された。コンスタンティノス5世の時代、見た目には政権は安定していたが、これは現代でいえば戒厳令をとともなる軍政下での政治的安定にすぎない。ところが、8世紀後半以降になると、政治的安定の結果として地方をも含め行政機構が整備されてくる。やがて、9世紀中頃には中央集権的な国家体制が完成される。つまり、8世紀末から9世紀初頭にかけては、「中央」と「地方」との間の相対的なバランスに変化が生じた移行期だった<sup>(11)</sup>。8世紀後半の政権の安定と「中央」の漸次的な優位が高官たちの政治的発言力の増大をもたらし、これに反発した「地方」のテーマが反乱を頻発させた結果、政情不安に至ったのである<sup>(12)</sup>。

### 3 レオン5世とミカエル2世の政権

先にも述べたように、レオン5世とミカエル2世は、803年に小アジアのテーマを率いて反乱を起こしたアナトリコイ長官バルダネス=トゥルコスの「従者」<sup>(13)</sup>であったが、主人を見捨てて皇帝側に寝返った。ニケフォロス1世は、報酬としてレオンをバルダネス亡き後のアナトリコイのナンバー2、フォイデラトイ師団長に、ミカエルはテーマの幕僚長にそれぞれ任命し、さらに首都に屋敷を与えた<sup>(14)</sup>。アルメニア人とあだ名され、パトリキオス（上級の爵位）のバルダネスの息子とされるレオンは、さらにアルメニアコイの長官に昇格する。しかし、職務上の不手際などによって解任されたが、813年ブルガリア戦の切り札としてミカエル1世によってアナトリコイ長官に抜擢された。

結局、対外的な危機がテーマ軍団のトップを再び皇帝の座に付かせたのだが、レオンは与えられたこの重責をとまかく果たした。まさに100年前、迫り来るイスラムの脅威から首都と帝国を守った同名のアナトリコイ長官レオンの再来であった。レオン5世当人もこのことを強く意識していたのか、息子の名前をコンスタンティノスと改め、さらに815年にはイコクラスムを再開させる<sup>(15)</sup>。

レオンの政権基盤が脆弱であったかどうかははっきりしない。残念ながら、レオンの治世にお

いて「高官・高位保持者たちのもつ影響力の大きさ」(121/8)を斟酌するための素材は、ヨハネス＝グラマティコス(後述)のコンスタンティノープル総主教任命が、若さ(こちらも重要)と「生まれの高貴さ」(121/7)(アルメニア系)を理由に「パトリキオスたち」によって反対された、という事件ぐらいである<sup>(16)</sup>。前政権を支えた高官のスコライ連隊長ステファノスやマギストロス(爵位)のテオクティストス(後述の宦官とは別人)が失脚したかどうかさえ、確言できないほどに情報は不足している<sup>(17)</sup>。政治への発言力を失ったと確実にいえるのは、イコノクラスムの再開によって解任・追放された総主教ニケフォロスとストゥディオス修道院長テオドロスくらいであろう。筆者も、一部の人物を除き政府構成メンバーに大きな変化はなく、「中央」の勢力は侮りがたく成長していた、と考えたいのだが。

次に、ミカエル2世の政権について考察する。

史料に登場する圧倒的多数の人物がそうであるように、ミカエルの出自もはっきりしない。皇帝となった人物にして、親の情報をイスラム史料に依拠せざるをえないという事実がそのことを雄弁に物語る。ともかく、親戚に軍団の幹部がいた、というだけでは彼の貧困生活を完全には否定はできないし、レオンなどに比べても彼は教養のある人物ではなかったらしい<sup>(18)</sup>。

ともかく、レオンの華々しい出世に対し、ミカエルは旧友がアナトリコイ長官に返り咲いたときも幕僚長のままであったようだ。かつてバルダネス＝トルコスが果たせなかった夢をレオンが実現させたことにより、ミカエルの人生も大きく道が開ける。近衛連隊エクスピテスの隊長に任じられたのである。その後のミカエルの役回りともあわせて判断すると、彼は戦地において一軍を指揮する将帥というよりは、むしろ皇帝レオンの側にいる補佐役の存在であったといえるだろう。首都を前にして、皇帝への即位を尻込みするレオンに「就かねば殺す」と迫ったというエピソード、そしてレオンが彼の息子(多分テオフィロス)の代父となった事実に注目しておきたい。

820年末、ミカエルは陰謀の咎で死刑を宣告されたが、逆に皇帝を暗殺した人々はミカエルを皇帝に擁立した。ここから、彼が少なくとも一部の高官の支援を受けていたことは間違いないが、陰謀加担者の詳細は伝わっておらず、政権交代にともなう政府部内での人員刷新の有無も同様に不明である。ただし、迫り来る反乱に備えるため、大きな変革はなかったと考えることは一定の説得力を持つ。

821年、ミカエル2世の即位に反旗を翻したのは、レオンのもう一人の旧友トマスであった。トマスはバルダネスの反乱にレオンやミカエルとともに参加していたが、主人を裏切ることなく反乱鎮圧後は東方へ逃亡したという。10年が過ぎてレオンが帝位に就くと、皇帝は彼を昔の自分の職であるアナトリコイのフォイデラトイ師団長に任命した。トマス反乱の原因は不明であるが、元アナトリコイ長官のレオンを殺して帝位に就いたミカエルに小アジアの多数のテマ将兵たちが反発した、と考えるのが自然である。790年や803年と同じパターンの反乱と考えたい。ちなみに、ミカエルはテマの将兵たちに評判が悪かった、という記録も残っている<sup>(19)</sup>。

ミカエルは首都の勢力とミカエル側に付いた二つのテマ、オブシキオンとアルメニアコイの軍隊のみで戦わねばならなかった。つまり、テマ反乱の最後を飾るこの内乱こそは、新生のミカエル2世の政権を支える高官・行政機構・近衛連隊などの「中央」と、トマスを皇帝に擁立し、1年以上にわたって首都を包囲したテマの連合軍が代表する「地方」との最後の決戦であった。ミカエルがこの反乱に勝利して後、7世紀以来のテマ反乱は終焉を迎える。

しかし、このような時代の趨勢を具体的な人間関係から裏付けることはほとんど不可能である。

小林氏は中央の高官の代表として、レオンの側近でミカエルを投獄しながら、トマス反乱の事後処理で活躍したヨハネス=ヘクサプリオスの名を挙げている。このヨハネスとは、ミカエル1世時代に首都の城壁防衛長官を務め、皇帝にレオンの野心について忠告しておきながら、レオン治下には運輸・外務長官（ロゴテテス=トッ=ドゥロム）に収まるといふ実に変わり身の早い人物であった。それだけに、彼一人をもってミカエルの政府を語ることはできないが、先代からの重臣をミカエルが重んじたとはいえるだろう。

小林氏は、トレッドゴールドにならってもう一人、802年のニケフォロス1世のクーデタに参加した宦官で財務長官のシノペのレオンを挙げている。しかし、トレッドゴールドの説に従うと、この人物はテオフィロスの治世末の838年まで実に36年以上（この間の皇帝交代6回！）同じ高官職にあったことになる。さすがにこれはナンセンスであろう。ヴィンケルマンや他の研究者もそのようには考えていない<sup>(20)</sup>。

結局のところ、「中央の高官や高位保持者たちの構成が安定」（126/10）していたとか、さらに彼らが「安定した集団としてのまとまりを保持していた」（126/18-19）など、一切がデータ不足なのである。もちろん、推測は可能である。しかし、その推測はその上にさらに推測を重ねることが無謀になってしまう程度の推測なのである<sup>(21)</sup>。

続いて、トマスの反乱が鎮圧された824年以降、残り5年のミカエルの治世を軍隊を中心に見ていこう。小アジアの全テマを巻き込んで3年にわたり続いた大反乱の後である、「テマの幹部」たちを再編することは焦眉の急であったに違いない。

しかし、テマについての情報も不足がちであり、名前がわかっているのはいずれも長官のみである。まず反乱の中核ともいえるアナトリコイの長官職には、この後いくつかのテマ長官を歴任するフォティノス（後述）、続いてアルメニア系のマヌエルが就任する。このマヌエルはミカエル1世の馬丁長官プロストラトルで、皇帝の退位に反対しながらもレオン5世からアルメニアコイの長官に任命され（別史料ではアナトリコイ）、しかも皇帝に堂々と発言のできる人物であった（テオフィロス下での活躍は後述<sup>(22)</sup>）。アナトリコイ以外では、ミカエルの治世末頃にコンスタンティノス=コントミュテス（後述）がトラケンオイ長官であったことがわかっているだけである。

次に海のテマ=キビュライオタイについて。首都を1年にわたり包囲した反乱軍の強烈な記憶も覚めやらぬ826年、アフリカのイスラム勢力がシチリアに侵攻し、さらにはクレタ島が奪われる深刻な事態となった。帝国において唯一まとまった海軍力であるキビュライオタイの任務は非常に重いものとなる。

史料からは3名の司令官が確認できる。まず、恐らくクレタ侵入時の長官と思われるヨハネス=エキモス。彼は、パレスティナから青年時代にアッタレイアに移住し、テマ長官に見込まれて長官代理（エク=プロソプ）へと出世した人物である。トマス反乱を支持しなかっただけに、反乱後の皇帝の信任は厚いものがあつた。

しかし、突如このヨハネスが修道生活へ入ったことから、年代記作者テオフネスの親戚のフォティノスが抜擢される。テオフネスの父も海軍関係者であり、10世紀初頭に海軍を率いたヒメリオス提督もこの一族の出であるから、海軍での経歴が予想されるが、彼はトマス乱後のアナトリコン長官でもあり、素直に皇帝が最も大きな信頼を置いていた人物に艦隊を任せたと考えておく。ともかく、彼は着任早々クレタ奪回作戦に従事するが失敗し、もう一つの最前線シチリア=テマへ長官として移った。

続く艦隊の司令官は、レオン5世時代にやはりアナトリコイの長官であったらしいクラテロス(後述)で、彼もすぐにクレタへ出撃するが戦死した。

以上のようなテマ長官たちの顔ぶれから判断すると、ミカエルの腹心であるかどうかはともかく、歴戦の将軍たちを起用したと考えていいだろう。小林氏は、将軍たちをミカエルと「同様の社会的背景を持った人々」「出自を同じくする」(129/17-19)というが、かなり大雑把な議論である。前述のように、ミカエルの出自の詳細は不明であり、それはここに挙げたテマ長官たちと同様である。経歴がいくらわかっているのはヨハネス=エキモスぐらいであるが、裕福な家の出とはいえ、彼は外からの移住者であった。

想像力をたくましくすれば、テマ長官たちの経歴として、レオン・ミカエルそしてエキモスには共通の出世のパターンが確認できる。すなわち、地方のテマ長官に認められて幹部や従者となり、やがてテマ反乱に関連して皇帝の知遇を得、長官職などの高い地位を得るというものである。それ以前の時期も含めて、当時の軍隊に見られた典型的な出世コースであったのかもしれない。ともかく、この出世コースがテマの反乱に関係していることに注目しておきたい。やがてテマ反乱が終焉を迎えるとき、このような出世パターンは形を変えるはずである。

その点において、上記の経歴と異なるパターンにマヌエルのものがある。彼は首都でまず皇帝と昵懇となり、テマの幹部のポストを得て昇進していった。これは9世紀中頃以降に増えていく出世パターンだと思われるが、それ以外のテマ長官たちの経歴は不明である。ともかく、皇帝は彼ら以外にこの状況下において軍隊を任せうる人物を見出せなかったのである<sup>(23)</sup>。

もう一つ重大な事実がある。以上のテマ長官たちはトマスを支持しなかった人々である、ということだ。軍隊での典型的な出世コースをたどり、かつて仕えたレオン5世とほぼ同じ道を歩んでいたトマスではなく、元テマ長官のレオンを殺して帝位に就いたミカエルを彼らは選んだのである。確言はできないものの、実戦で鳴らした歴戦の武将ということでは、これらのテマ長官たちはミカエルよりもレオンやトマスにより近い存在であったのだからである。

ともかく、レオン・ミカエル・トマス、これら3人は、小林氏の言う「社会的背景」において利害を極端に異にしたとは思えないのだが<sup>(24)</sup>、彼らは皇帝位をめぐる必死に争ったのである。そのような意味においては、皇帝とは社会的な利害などを超越した存在でもあった。ともかく、皇帝位をめぐる権力闘争の真っ只中で、「テマの幹部」たちは厳しい選択を迫られた。

以上まとめておく。ミカエルが「テマの将校たちを積極的に登用した」とか「新たに登用された人々」(130/6-7)があったことは史料からは確認できない。ミカエル2世は、レオン5世時代からの有能な将軍たちを、テマ長官として引き続き重用したのである(もちろん、師団長からの昇格もあったであろう)。ミカエルが彼らを信任していたとするならば、それは「皇帝は自分たちの利害を代表してくれる存在」(ibid.)であるからではなく、トマスの乱において彼らが皇帝を支持して戦ってくれたからである<sup>(25)</sup>。

小アジアの大半のテマによる新帝への反乱が3年にも及んだ事実からすると、「ミカエル2世の支持基盤となっていた軍事力は、首都の高官や高位保持者に対抗して政権を維持していく上で、大きな力になった」(130/9-10)という表現は納得できない。むしろ、高官を含む「中央」の勢力こそがミカエルの支持基盤であった可能性の方が高いのである<sup>(26)</sup>。

ともかく、ミカエル2世の治世は「政治的困難や苦境に悩まされた時代」(117/18)であり、大半のテマにそっぽを向かれたミカエルにとって、残された短い治世後半、イコンをめぐる論争を回避し、成功しなかったとはいえクレタ島奪回作戦を推進したことなどは、やや具体性に欠け



るとはいえ、皇帝として立派に統制力を発揮し、巧みに政局を運営したと評価しても大きな間違いではないだろう<sup>(27)</sup>。

#### 4 テオフィロスの政権

先行するレオン5世やミカエル2世とテオフィロスを対比した場合、真っ先に気がつくのは、彼が多く的人生経験を積むことなく、非常に若くして帝位に就いたということである(テオフィロスの子ミカエル3世も同様)。即位した829年、トレッドゴールドによれば、テオフィロスははまだ16歳であった。ついでに言えば、彼の治世はレオンやミカエルよりは長いものの13年間で、30歳の若さで世を去っている。幼少の頃より共治帝ではあったが、父親ミカエルにとって若い息子の行く末は気がかりであっただろう。

実際、テオフィロスの治世は不吉な事件で始まった。運輸・外務長官のミュロンが、軍隊の中心人物ともいえるマヌエル(前出のテマ長官)を陰謀の咎で中傷し、逸早くこれを知ったマヌエルはバクダードのカリフの下に逃亡したのである。幸いにも、即位の挨拶にカリフ国を訪れたヨハネス=グラマティコス(皇帝の教師で後の総主教)の活躍もあって、翌々年マヌエルはコンスタンティノープルに戻った。皇帝は彼との和解のため、金銀財宝に加え、マギストロスの爵位とスコライ近衛連隊長の職(中央軍最高司令官)でマヌエルを迎えた。さらにテオフィロスは、彼の子供たちの代父の役も務めている。これ以後、マヌエルは皇帝の親征にはいつもそばにつき添い、838年の戦いで戦死するのである<sup>(28)</sup>。

このマヌエルというアルメニア系の将軍をについては、昔から議論が絶えない。というのも、一部の史料が彼はテオフィロスの妃テオドラの伯父であり、ミカエル3世の治世にも活躍したと記述しているからである。ここでは詳しく議論できないが、結論はまだ出ておらず、印章史料からは、この将軍はテオドラとは無関係との仮説も十分に説得力をもっている。

マヌエルが話題になったので、先に将軍たちとの関係を見ておく。

まず、「テマの幹部」について。838年、皇帝軍が大敗を喫した後、テオフィロスの父祖の町アモリオンがイスラム軍の手に陥落するが、その時この都市の防衛を担った将軍たちの名前が知られている。アエティオス(アナトリコイ長官?)、テオフィロス(エクスクビテス近衛連隊長?)、パソエス、コンスタンティノス(バブツィコス? ビグラ近衛連隊長)、宦官でプロトスパタリオスのテオドロス=クラテロス、そして師団長のカリストスである<sup>(29)</sup>。

最後の人物を『アモリオンの42殉教者伝』はメリセノスという名前で呼んでいる。メリセノス姓を名乗る人物は、コンスタンティノス5世およびミカエル3世の両時代にアナトリコイ長官として確認でき、このカリストスも軍人としては名門の出なのかもしれない。事実としての信憑性は低いかもしれないが、この史料は彼の経歴を次のように紹介する。若くして勉学のため首都に出て、その後スコライ連隊に勤務して部隊長となる。「ゴート人」の地(クリミア半島?)に派遣され、後にコロネイア(後のテマ)の長官(ドックス=師団長?)となったがアラブ軍に捕らえられ、838年の捕虜の中に加えられた。このカリストスは、皇帝との個人的な結び付きが確認できる数少ない存在であり、彼がメリセノスなのかどうかも含め慎重な議論が必要である<sup>(30)</sup>。

軍隊には皇后テオドラの兄弟たちも関係を持っていた。ビグラ近衛連隊長<sup>(31)</sup>にはペトロナスが起用され、彼は後にペルシア系部隊の将帥テオフィオボス(後述)の暗殺を皇帝に命じられる。皇后のもう一人の兄弟バルダス(後のカイサル)は、840年頃にこのテオフィオボスとともに東方

アブハジア（アバスギア）へ不名誉な遠征をしている（当時の官職は不明）。

ちなみに、ミカエル2世の治世末かテオフィロスの初頭以降、艦隊の司令官としてクレタに遠征をするオオリュファスなる人物も、史料の中でビグラ連隊長として言及され、ペトロナス同様にテオフォボスの暗殺に加担した<sup>(32)</sup>。

その他のテマ長官としては、トマス反乱時にアルメニアコイ長官としてミカエルを支持した武將オルビアノスは、テオフィロス治下でも小アジアのテマ長官職にあったらしい。また、ミカエル2世の治世末からテオフィロスの時代にトラケシオイ長官であったコンスタンティノス=コントミュテス（その後テオドラ一族と結びつく）は、後にミカエル3世の治下にシチリア長官となる。さらに、テオクティストス=ブリュエンニオスがテオフィロス末・ミカエル3世初めにテマ=ペロポネソス長官として活躍している。その他、アラブの歴史家アル=タバリは、838年のブケラリオイ長官をテオフィロスの母方の従兄弟であった述べている。

軍事面で注目したい現象として、テマ軍に関係のない外国人の重用がある。まずは、後にビグラ連隊長となった人質アルメニア人のコンスタンティノス=マニアケス。彼は10世紀の歴史家ゲネシオスの祖父で、テオフィロスやミカエル3世の側近として活躍する。そして、前述の将軍テオフォボス。アップース朝からの投降者であるテオフォボスは、改宗の後パトリキオス位を授与され、テオドラの妹エイレーネーと結婚<sup>(33)</sup>し、引き連れた多数のペルシア人部隊の司令官にそのまま収まった。皇帝は破格の待遇で彼を迎えたことになるが、これはかなり不用意な重用であった。

というのも、838年の帝国軍の大敗北を助長したこのペルシア人部隊は、戦線離脱の後、黒海沿岸に留まり皇帝死亡説に促されてテオフォボスを皇帝に擁立したのである<sup>(34)</sup>。テオフィロスがペルシア人部隊の反抗を鎮め、テオフォボスと和解するには一年以上を要した。結局、自身の死が迫り来る中で皇帝はこの人物を暗殺させる。

以上、整理しておく。1) 古参の将軍たち（マヌエル、オルビアノス、オオリュファス、コンスタンティノス=コントミュテス）、2) 古くから軍隊において実績を示してきた一族の者（テオドロス=クラテロス、テオクティストス=ブリュエンニオス、そしてマヌエルと似た昇進コースを歩むカリストス=メリセノス）、3) 皇后テオドラに連なる人々（ペトロナス、バルダス、コンスタンティノス=パブツィコス？、某ブケラリオイ長官）、4) 新たに登用された外国人勢力（テオフォボスとコンスタンティノス=マニアケス）、不明2である。要するに、テオフォボスの場合を除けば、テオフィロスは特に注目するような人事をしていないのである。適材適所というしかないが、同様のことは文官についてもあてはまるだろう<sup>(35)</sup>。

けれども、私は皇帝政府（皇帝も含む）と中央軍やテマ軍との関係は基本的には良好であったと考えている。838年には皇帝戦死の噂やテオフォボスの反乱といった絶好の機会がありながら、軍隊の内部にはこれを利用する動きは確認できない<sup>(36)</sup>。大敗北に動揺する皇帝<sup>(37)</sup>をよそに、「中央」の政府は軍隊をともかくも掌握していたのである。テマ軍にほとんど不穏な動きが見られないのは、テオフィロスだけでなく、ミカエル2世（もちろんトマスの乱は別だが）やミカエル3世の時代にも共通する傾向であり、その原因は皇帝の個人的な力量以外のところに求められる。

テマが政府にコントロールされていた理由は、先にも見たように、8世紀末から9世紀初頭の大規模なテマ反乱の鎮圧を通じ、「テマの改革」が進められていたからである。テオフィロスの時代にも、パフラゴニア・カルディア・ケルソンの3テマ、カルシアノン・カップドキア・セレウケイアの3つの辺境防衛区（クレイスラ）が設置されている。テマの改革が完成段階に近づい

ていたのである。このような施策は特定の皇帝の裁量を超え、「中央」の政府が8世紀後半以来推進してきた国家政策であった。

最初に述べたように、小林氏は首都の「高官・高位保持者」=文官という図式を前提とする。このことは、「軍事力に対して深い利害関係を持たない首都の高官や高位保持者」(143/3)という表現に端的に表わされている。これに対応して、「テマの幹部」たちは地方の利害を代表するものとして提示される（では中央の近衛連隊長たちは?）。しかし、ここでいう「テマの幹部」とは長官とほとんど同義であり、これに対して、遠征以外に自分の出身テマを離れない、首都には縁のない下士官や比較的地位の低い将校たち（それゆえ史料に登場しない）の動向一切は残念ながら不明なのである。

皇帝の勅任官であるテマ長官（そして師団長）に出世した人々は、赴任地を数年ごとに動いていた。彼らは官職・爵位（屋敷も）を首都において皇帝から直接受け、また在職時以外の時間をしばしば首都で過ごし、宮廷に出入りすることも頻繁であったはずだ。彼らが地方に広大な所有地をもっていたことは事実かもしれないが、だからといって「地方の有力者」(144/19)とのみ呼ぶことは誤解を招きかねない。ほとんど毎年のように繰り返される防衛戦や対外遠征に備えるため、テマ長官の在職期間が比較的長く、現地の将兵たちと利害を共にする可能性のあった（そして反乱も頻発した）8世紀とは事情はかなり異なっていたのである<sup>(38)</sup>。

さて、次に「首都の高官・高位保持者」たちの動きを見てみよう<sup>(39)</sup>。

即位したばかりの16才のテオフィロスが手掛けたのは、かつて820年に彼の代父でもあるレオン5世を殺害し、父ミカエルを擁立した者たちの処罰であった。『シメオン年代記』では皇帝は元老院議員たちを集めて裁判を開いたとなっているが、『続テオフィロス年代記』や『ゲネシオスの皇帝列伝』では、戦車競技中にテオフィロスは抜き打ち的に元老院議員たちに殺害者たちの処罰を問い質し、「死刑」との答えに即刻競技場にて彼らの首を刎ねさせたという。おそらく後者の情報はフィクションであろうが、事件そのものは「正義」にもとづく裁判というよりも、元老院議員たちに処罰の責任を負わせた抜かりない行為のようにも見える。レオン暗殺に深くかわり、父ミカエルの側近となった宦官のテオクティストス（後のテオドラ摂政期の宰相格）が処罰されていないのも気になる。帝国屈指の教養人ヨハネス=グラマティコス<sup>(40)</sup>の薫陶を受け、正義をこよなく愛する若い皇帝の登場を強くアピールするこのエピソードには、父の取り巻きの一部の者たちを政権から排除する、という宮廷クーデタの可能性を一応考えておくべきではないか。先に述べたように、武将マヌエルへの中傷と彼の逃亡という事件も起きていたのだから<sup>(40)</sup>。

続いて、彼の13年間の治世中、人名が比較的わかっている運輸・外務長官たちの顔ぶれを見てみよう。まずは、マヌエルを中傷したミュロンであるが、それ以外の彼の経歴は不明である。けれども、皇后テオドラの弟ペトロナスの義父であった事実から想像するならば、テオドラの一族が縁戚関係を望む（時期から考えて）人物だったのだろう。

ミュロンの後任として、トレッドゴールドは聖人伝の記述から、831年当時の長官として、マヌエルの帰還に貢献したヨハネス=グラマティコスの兄弟アルサベルを想定している<sup>(41)</sup>。アルサベルは皇后テオドラの妹と結婚し、マギストロスの爵位を受ける。彼の出世は、兄弟のヨハネスを振り出しに、皇帝との姻戚関係によるものであることは明らかである<sup>(42)</sup>。

そして、先述した宦官のテオクティストス。レオン5世時代から宮廷にあり、ミカエル2世の陰謀に荷担して皇帝の側近職「祐筆」<sup>(43)</sup>を務めた人物である。後で述べるように、テオクティストスはテオフィロス亡き後、摂政テオドラの寵を受け、幼少のミカエル3世が長生するまで運輸・

外務長官の職にあって、国家の舵取りを担当した<sup>(44)</sup>。

皇帝の教師ヨハネス=グラマティコスが存在も忘れてはなるまい。彼こそは、若いテオフィロスに正義とそしてイコノクラスムを植え付けた張本人であり、第2次イコノクラスム最大のイデオログとしてレオン5世やミカエル2世の治世にも活躍し、テオフィロスの即位により総主教顧問官、治世後半には総主教を務めた。当然、843年のイコン復活に際しては解任・破門されている。ヨハネスは、テオフィロス登極後さらに大きな影響力を発揮したと考えていいだろう。

実際、皇帝の就任直後にカリフへの使節として派遣され、マヌエルと会って彼に帝国への帰還を促した。さらに、興味深いエピソードがある。皇帝の娘婿で、カイサルの爵位をもつアレクシオス=ムセレ<sup>(45)</sup>は、陰謀の疑いから遠征地シチリアから呼び戻され、鞭で打たれて投獄、爵位・財産は没収となった。これに対し、彼を連れ帰ったシュラクサ大主教テオドロスは、処罰しないとの約束に違犯するとブラケルナエ教会で皇帝に直訴したが、激怒したテオフィロスは彼を祭壇から引きずり下ろし、打ちつけた上追放にした。この皇帝の理不尽な振る舞いを糾し、二人の赦しを勝ち取ったのが総主教のヨハネスだったのである<sup>(46)</sup>。

それ以外に知られている「高官・高位保持者」たちは、首都でのイコノクラスム推進の要の首都長官を務めるコンスタンティノス=ミュイアレス（ミュギアレス）や司法長官のエウスタティオス=モノマコスなど、テオドラ一族と姻戚関係を持つ人々（それゆえ名門か？）であった。官職は不明だが、839年にフランク王国へ派遣された人物、パトリキオスのテオドンシオス=バブツィコスも、テオドラの妹の夫のコンスタンティノス=バブツィコスの血縁者であり、やはり同様のケースである。

また、ハザール国の要請を受けて、ドン川流域にサルケル要塞を建設するため派遣された、スパタロカンディダトス（爵位）のペトロナス=カマテロスは、帰国後に黒海北岸の帝国領ケルソン防衛の必要性を皇帝に説き、これが認められてプロトスパタリオス位に昇格した上で初代のテマ長官として赴任した。テオフィロスの治下で例外的に昇進が確認できる人物である。

以上のデータから、どのようなことがわかるだろうか。残念ながら、注目するほどの傾向は提示できないのではないだろうか。政府の中枢には昔からの重臣を中心に、それ以外は血縁者か名門とおぼしき家柄の人物（多くはその両方）を登用する、という平凡な結論に甘んじるしかない<sup>(47)</sup>。

ともかく、以上のような傾向は軍隊でも見られたことであった。軍隊でのスコライ連隊長マヌエル、中央行政ではテオクティストスたち、そして教会のヨハネス=グラマティコス。人事面から眺めた場合、いつもミカエルやテオフィロスの側には彼ら重臣たちが控え、皇帝の政治をサポートしていたのである。これは、経験に乏しい若い皇帝にとって妥当な選択であった。逆に、テオフィロスのような「異質な存在」の寵愛は、結果的には政権内部の紛争を引き起こす原因となったのである。

テオドラの一族について簡単に見ておく。上でも書いたように、テオドラの伯父マヌエルは前出の将軍マヌエルとは別人かもしれない。しかし、その場合でも伯父マヌエルはマギストロスにして「君主（ミカエル3世に違いない）の教師」という肩書きを持ち、テオフィロスにとってのヨハネス=グラマティコスの立場にある重臣であったようだ<sup>(48)</sup>。

このマヌエルが率いる一族は、パフラゴニアに大規模な土地を所有する地方の有力者だったらしいが、名字を欠くアルメニア系である点を考えると、9世紀に入ってからの新興勢力である可能性が高い。ともかく、マヌエルの兄弟マリノス（テマ師団長、故人？）の娘テオドラがテオフ

ィロスに見初められたことが一族隆盛への出発点となった。

皇帝家の「外戚」としてテオドラの兄弟姉妹たちは、多分皇帝の肝いりで次々と有力な人々と婚姻関係で結ばれていった。やはり新興勢力ながら皇帝の「御意見番」ヨハネス=グラマティコス一族（アルメニア系）とつながり、またコントミュテス、パプツィコスなどの軍人を多く輩出する一族と結び付いた。テオドラ一族からも軍人が出ているから、このような結び付きは不自然ではない。例外的なのは、ペトロナスがミュロン娘の婿となったことくらいであろうか（テオドラ結婚以前だろう）。

以上は、テオフィロスが「テオドラの一族を利用して、自らが信を置いている人々と活発に婚姻関係を結んでいる」（141/2-3）といえなくはないが、従来の研究はこれを「皇帝一門」（141/14）としてではなく、皇帝と結び付くテオドラ一族が姻戚関係によって勢力を拡張したと見ている。さらに言えば、姻戚関係で結ばれているという事実だけで、この関係を「ネットワーク」（141/12）と呼ぶのにも無理がある。現実の政治過程において、この「一門」に属することがどのように機能したのか、皇帝によりどの程度有効に活用されていたのか、具体的に検証しなければならぬだろう。

たとえば、ヨハネス=グラマティコスとアルサベル兄弟は熱烈なイコノクラストと目されるのに対し、テオドラの一族は明らかに隠れてイコンを崇敬していた。確かに、第2次イコノクラスムは、8世紀のものに比べて規模も小さく、盛り上がらなかったというのが通説である。しかし、イコノクラスムという「正義」を重んじ、筋金入りで迫害を推進する皇帝がいた首都だけは別である。テオフィロスの側近たちにとって、自身の信仰の問題はかなり重大であったはずであり、事実陰謀の温床ともなった。イコノクラスムに関連した迫害では、皇后の血縁に属するニケタス=モノマコスが追放されている（司法長官エウスタティオス=モノマコスもイコン派）。同様に、後の総主教フォティオスの父で、ヨハネス=グラマティコスの義兄弟、スパタリオスのセルギオスも財産を没収され、妻子共々首都を追われた。イコノクラスム関連以外でも、ブラケルナエへの参拝の道中での皇帝への直訴によって、皇后の兄弟ペトロナスは違法建築を理由に公衆の面前で鞭打たれた<sup>(49)</sup>、皇后テオドラ自身も商業活動を皇帝から叱責されている<sup>(50)</sup>。

このように、テオフィロスは系図上でつながる人物であっても容赦なく処罰する「公正な」皇帝であり、彼にとってこの姻戚関係が「ネットワーク」と呼びうるほどの意味をもっていたのだろうか、慎重に吟味する必要がある<sup>(51)</sup>。

確かに、テオドラやヨハネス=グラマティコスのアルメニア系一族は、「ミカエル2世やテオフィロス（レオン5世も含めるべき）によって登用された新興勢力」（142/3）であった可能性は高い。それゆえ彼らは、政府の要人（ミュロンなど）や名字を持つ軍人の一族との婚姻を積極的に推進したのである<sup>(52)</sup>。けれども、そもそも政府の高官たちもその大半はレオン5世、ミカエル2世そしてテオフィロスによって登用された人々であり、テオドラ一族をもって「既存の高官たちとは一線を画す」「新たな集団」（142/5）とまで断言するには、またしても証拠不足である<sup>(53)</sup>。

ともかく、テオフィロスの治世やテオドラ摂政期には、テオドラの一族はその姻戚関係にもかかわらず、権勢と呼びうるような影響力は発揮できなかったようだ。一族のバルダスやペトロナスが実権を掌握するのは、テオクティストス暗殺後のミカエル3世下であり、その時にはテオドラ自身は引退、血縁者の多くも姿を消していたのである<sup>(54)</sup>。

官僚たちについても一言触れておく。確かに、皇帝の恩顧を受けた中堅の官僚たちは「親密な

支持者となった」だろう。しかし、それはテオフィロスが皇帝であれば当然のことであって、もしも反対に篡奪が起これば、心機一転して新しい皇帝に仕えるのか中堅官僚なのではないか。彼らはそうやって政権が不安定な9世紀前半を生き延びてきたのではなかったのか。ともかく、テオフィロスに引き立てられ、中堅官僚から出世した人物を何人か提示できればいいのだが、実際にはミカエル2世やテオフィロスが「高官や高位保持者たちの交代・刷新を漸進的に行」(134/14) った、というも推測にすぎないのである。

テオフィロスが「帝国の歴史の中でも、名君の誉れが高い皇帝」(115/1) であるとするならば、その理由は、父が残してくれた重臣たちの意見を尊重し、地方をも含めた行政システムを完成させて、これを有効に活用したことに求められる<sup>(55)</sup>。このような見方は平凡だが、研究者たちが大筋で同意している通説に近い。もしも、テオフィロスが「強力なリーダーシップを発揮して政治を主導したことが強烈にイメージづけられる」(115/2-3) のであれば、なおさら以上の点を押さえておくべきである。自らが構築した人脈をもとにして、テオフィロスが「先任者たちとは比べ物にならない強力なリーダーシップを発揮」(116/11-12) したことは確認できないのだから。

以上きわめて粗削りではあるが、9世紀中盤までのビザンツ皇帝政権についての筆者のイメージを述べてきた。次章のミカエル3世の治世では、小林氏の「ミカエル論文」へのコメントを中心に記述を進めたい。

## 5 ミカエル3世の時代

テオフィロスの政権は若々しいものであったが、息子ミカエルについても同様である。842年の帝位継承時には彼は2歳であり、母親が摂政から離れた856年でも、いまだ16歳にすぎなかった。カイサルの叔父バルダスの暗殺を敢行したのが10年後の866年、そして翌年には共治帝としたバシレイオス(1世)によって殺害される。30歳で死去した父親よりもさらに短い26年の生涯であった。

それだけに、病魔に倒れたテオフィロスは、枕元に高官たちを呼び寄せて息子ミカエルの行く末を託したのである。この後、10年以上の長きにわたり事実上国家の舵取りを担当したのが、古くからの重臣の宦官テオクティストスであった。摂政テオドラの絶大な信頼を受けたテオクティストスは、イコン崇拜の復活、それに付随した総主教の擁立、海軍の強化(一時的なクレタ島奪回)など、この重責を担ったとされる<sup>(56)</sup>。

もちろん、これらの功績を彼一人に帰すことはできない。軍隊や官僚機構がうまく機能したことも大きかっただろう。けれども、行政責任者としての彼を評価してもよいのではないか。そもそも、健全財政の推進や世俗教育の保護といったテオフィロス治下の政策が継承されている事実を見ると、先帝の精力的な統治活動の如何とは別に、テオクティストスや政府首脳たちの政務遂行能力は否定できないだろう。

855年、君主専制に憧れる若きミカエル3世とテオクティストスによる政治の専断に反感をもつ皇帝の叔父バルダスにより、宮廷内で彼を暗殺する陰謀が決行された。長く続いたテオクティストスの政治に不満をもつ高官たちもこれに呼応したようだ。

この宮廷クーデタの結果、政治の実権はバルダス一派に移った。娘婿ジュンバティオスは運輸・外務長官に、親戚のフォティオスが尚書局長官から総主教、スコライ連隊長職は、バルダス自身

から兄弟のペトロナスを経て、息子アンティゴノスへと移る。

テオドラがテオフィロスの妻となったことで、その一族の者が国家機構内で重要な地位を占めるようになったことは、上に見たとおりである。しかし、彼らがより高い爵位・官職を手にしたのは明らかにこのクーデタの後であった。バルダスは、テオクティストスの時代に政治の表舞台から排除されていたからこそ暗殺を計画したのである<sup>(57)</sup>。ただし、前章でも述べたように、ここで「広範な親族ネットワーク」(62/8-19)なるものを提示するには注意を要する。テオドラ一族に連なる者たちの多くが、すでに死亡したり失脚していたからである<sup>(58)</sup>。

皇帝ミカエル3世の裁量権確保の問題を「高官層」との関係の中で考える小林氏は、バルダスが権力を掌握していた時代、テオフィロスと同様に「ミカエル3世が自ら主導して政策を進めていた」(146/8)という<sup>(59)</sup>。しかし、この主張も検証は困難である。

ミカエルに厳しい後世の年代記は、皇帝は取り巻きの政府高官や官僚たちと戦車競技などの遊興に耽っていたという。小林氏のいう「従者団」の、パトリキオスのヒメリオス(コイロス)、尚書局長官ケイラス(アガリアノス?)、運輸・外務長官下の高級官僚クラサス、プロトスパタリオスのテオフィロス(グリュロス)、パトリキオスのバシリキノス(バシリスキアノス:後にミカエルの身を暗殺者から庇って負傷)、コンスタンティノス=マニアケス(前出)らである。ところで、これらのメンバー構成には注目すべき点が2つある。どちらも小林氏のことばを拝借する。

まず、彼らの「大半がバシレイオス1世の時代になってもその地位を維持して」(47/17)いること。ミカエル3世は頻りに彼らの代父役を務めたいが、彼らの多くは皇帝と運命をともにはしなかったのである<sup>(60)</sup>。つまり、彼らは日和見的な役人たちだったかもしれないのである。経験豊富で老獪な彼らに対して、二十前後のミカエルはどのようにして政治的な発言力を確保したのだろうか。史料は皇帝が彼らに気前よくお金を贈ったと伝えているが、もしかするとこれこそ直接政治とは無関係な場面にミカエルと高官たちを登場させた原因だったのかもしれない<sup>(61)</sup>。

気がつく第2の点。9世紀の地方の有力者たちは、ミカエル3世の時代に「中央の皇帝や有力者との結合を得て、政治に積極的に参画しようと意図するようになっていた」(54/9-10)と小林氏は主張する。ところが、皇帝ミカエル3世と「結合」している上記の人々の中には地方出身者があまり見当たらないのである。皇帝は本当に政治上の発言力をもっていたのだろうか。彼が大きな政治責任を担っていない可能性も十分にありえるだけに、まずこのことへの反証を提示しなければなるまい<sup>(62)</sup>。

バシレイオス1世の治世については、稿を改めて考察することにして、ここでは彼の伝説的な出世物語について2・3コメントだけしておく。

まず、彼がさかんにアルメニア系の人脈を利用していること。このような人脈はどの程度有効だったのか、すべては闇の中である。そもそも、テオドラ一族もアルメニア系であり、バシレイオスの出世にも関係があるかもしれない。バシレイオスとミカエル3世との個人的な信頼関係とは別に、押さえておく必要がある。

次に、バシレイオスが常に宮廷に出入りし、皇帝の側近く接する役職にあったという事実から、小林氏は彼が政府の高官たちとの関係が希薄であったのではないかと推測している。けれども、「ミカエル3世の側近高官集団の人々とは、コンスタンティノス=マニアケスを除くと、バシレイオスとの間の人間関係が全く看取できない」(50/17-18)のは、史料のバイアスの結果である可能性も一応ある。彼を「高官層に属さない人物」(68/3-4)と断定する前に、慎重な議論が

必要であろう<sup>(63)</sup>。いずれにせよ、高官たちのバシレイオスへの反発の原因としては、無位無官からわずか10年ほどでパトリキオス、さらに共治帝・単独皇帝へと権力の階梯を一気に登り詰めた、他に例を見ない急激な出世が関係しているのではないか<sup>(64)</sup>。

ともかく、共治帝・単独皇帝となった後のバシレイオスの政権掌握の方法は、一族を政府要職にあてるなどの点でバルダスの場合と大きくは違わないような印象を受ける。

## お わ り に

9世紀20年代のトマスの乱を最後に、かつて大きな反乱を繰り返してきた「地方」のテマも、もはや自ら皇帝を擁立することはできなくなっていた。テマの将兵にとって、8世紀には皇帝は少なくとも心情的には自分たちが支える存在であったが、今や彼は雲の上の存在へと変貌しつつあった。やがて、皇帝は戦場にもあまり姿を見せなくなるだろう。

けれども、高官であるテマ長官や師団長たちは彼らとは立場を異にしていた。首都に出入りする彼らは、依然として皇帝の擁立・廃位など宮廷での政治抗争にしばしば関与していた。もちろん、この時期には彼らもテマの軍事力をもはや露骨に利用しようとはしなかったが<sup>(65)</sup>。というよりも、利用できなかった。地方の行政や軍事を統括する中央集権的な統治機構が完成されていたからである。

「テマの改革」について史料は詳しく記してはいないが、近衛連隊の整備により中央軍が編成され、小アジアのテマも次々と分割されていく。もちろん、同時に軍隊の人事や徴税をも含めて、地方行政システムの整備が進行していったであろう。つまり、テマは軍隊・軍管区としてだけでなく、行政区画としての色合いを濃くしていった。アナトリコイあるいはトラケシオイなど、構成兵士を表す男性の複数形で呼ばれてきたテマも、9世紀後半以降は単なる地理的な単位として中性単数形（例：アナトリコン）で史料に登場することが多くなる。

8世紀末以降の「テマの改革」と平行して、首都の近衛連隊だけでなく地方のテマ軍団を指揮する長官（そして師団長）たちも、「中央」の行政機構の中に組み込まれ<sup>(66)</sup>、高官の重要なメンバーとなっていく。テマの将校たちは、長官や師団長への出世の糸口を次第に「中央」の政府へのアピールなしには掴めなくなった。すべては首都に出なければ始まらなくなりつつあったのである<sup>(67)</sup>。それゆえ、テマ長官への勤務もそこそこに、若者バシレイオスはコンスタンティノープルを目指した。もちろん、首都は出世を目指す誰にでも門戸を開いていたわけではない。その扉はますます狭まりつつあった。有力者とのコネとそれを可能にする相当程度の経済的基盤がそれである。もちろん、この原則は首都に住んでいる有力者たちにも当然あてはまったはずである<sup>(68)</sup>。

以上に挙げた「テマの改革」の成果はテオフィロスの時代に華開いたが、その準備はミカエル2世やそれ以前の時代から始まっていたし、バシレイオス1世以降もお継承されていく。当然のことながら、これらの施策の企画・立案・実施を一貫して担当したのは、個々の皇帝ではなく「中央」の政府・官僚機構であった<sup>(69)</sup>。



## 注

- (1) Treadgold, W. T., *The Byzantine Revival 780-842*, (Stanford Univ. P.), 1988. それ以外については本書文献リストを参照. Winkelmann, F., *Quellenstudien zur herrschenden Klasse von Byzanz im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin, 1987. ヴィンケルマンの研究については、以前に紹介したことがある: 「プロソポグラフィ―研究と8・9世紀ビザンツ― F. Winkelmann の研究を中心に」『西洋史学』150号, 1988年, 69-73頁.
- (2) 本稿と関係するのは、「9世紀前半ビザンツにおける皇帝権力―テオフィロス政権を支えた人々―」『史林』79巻5号, 1996年, 115-148頁(「テオフィロス論文」と呼ぶ)と「ミカエル3世と「従者団」―9世紀中盤ビザンツ帝国の皇帝と支配構造―」『史林』78巻2号, 1995年, 38-74頁(「ミカエル論文」と呼ぶ)の2篇である. 両篇には齟齬を来す箇所も多いが、その際にはより新しい「テオフィロス論文」の主張を優先した.
- (3) しかし、彼らが「8世紀末までに社会的なまとまりを形成していき、何代も連続して高官職につく家系が出現」(120/4-5)とまでいうのは、実証の可能域をかなり越えた発言である. 実際には、9世紀になっても複数の資料から確実に3代以上たどれる家系は、皇帝家以外には数えるほどしかない. また、個人名とあわせて登場する、名字や異名をこの時点で「家門名」(120/5)とまで言い切る勇氣は私にはない. ちなみに、高い爵位を受けた人は「高位保持者」というよりも「高位保有者」high-ranking holders と呼ぶべきではないだろうか. 爵位は一代かぎり、しかも没収されることもあったのだから.
- (4) ただし、ミカエル論文ではこういった区別は確認できず、代わりに「確固たる社会的結合」としての「高官層」(64/14, passim)が登場する.
- (5) 小林論文での「テマ次官」. テマが軍団と同時に軍団の管轄区域をも意味するように、トゥルマとは軍団の下の師団と同時に軍管区テマの下部の領域をも示す.
- (6) 以下の議論では、次の拙稿を参照のこと. 「テマ反乱とビザンツ帝国―「テマ=システム」の展開―」『西洋史学』144号, 1987年, 22-40頁; 「テマからテマ制へ―テマ制度の成立時期をめぐって―」『待兼山論叢』(史学篇), 21号, 1987年, 29-50頁; 「テマの発展―軍制から見たビザンティオン帝国―」『古代文化』41巻2号, 1989年, 8-21頁; 「スラヴ人トーマスの乱をめぐって」『西洋における世界国家の経営と民族問題』(研究成果報告書: 代表者合阪學), 1991年, 13-20頁; 「イコノクラスムの時代について―8世紀のビザンツ―」『待兼山論叢』(史学篇), 26号, 1992年, 63-87頁; 「8世紀後半のビザンツ―エイレーネー政権の性格をめぐって―」『西洋史学』174号, 1994年, 36-53頁.
- (7) 一口に政治的混乱といっても、7世紀と8世紀の交と8世紀から9世紀にかけてのものは大きく異なる. 後者にあつては、皇帝政権の不安定や対外的な危機にもかかわらず、国家そのものは十分に磐石であった.
- (8) この時点でのタグマは「中央政府独自の軍事力」(119/14)というよりは、皇帝の親衛隊に近い. コンスタンティノス5世のこれらの施策については、テマ連合の頂点に立つ皇帝への権力集中が、後世から見ると「テマ改革」と解釈できるだけなのである. とにかく、史料に登場するコンスタンティノスは、イコノクラスムの推進など首都の高官の意向などほとんど意に介しなかった点では、テオフィロス以上に「強力なリーダーシップを発揮して政治を主導したことが強烈にイメージづけられる」(115/2-3)人物である.
- (9) 小林功「ニケフォロス1世の対スラヴィニア移住政策―9世紀初頭のビザンツ帝国, バルカン半島, 地中海―」『西洋史学』181号, 1996年, 1-16頁を参照.
- (10) 彼も自ら先頭に立って「リーダーシップを発揮」するタイプであったようだ.
- (11) 私の場合、「中央」や「地方」という用語はあくまでも便宜上の操作概念としてカッコを付ける.
- (12) 小林氏は、「陰謀やクーデターが相次ぎ、皇帝権力がきわめて不安定な状態となっていた8世紀後半以降、高官たちは大きな政治的影響力を持つようになっており」(116/4-5)として、皇帝政権の弱体化の結果として「高官・高位保持者たち」の影響力拡大を考えているようだが、私とは原因と結果が逆転している. また、首都の高官たちの「政治的影響力の源泉は皇帝権力にあった」(120/2-3)から「皇帝権力から完全に独立することはでき」(120/9)ず、「政情が安定して皇帝権力の動揺が収まるにつれ、独自の発言力を後退させていく」(144/14-15)という.

- (13) Theophanes Continuatus, 6.20-7.5.
- (14) 地方でテマ軍団の要職を歴任する彼らも、こうして首都に結び付けられていったのかもしれない。Theophanes Continuatus, 9.9-13.
- (15) 小林氏は「恐らくレオン五世は高官や高位保持者の政治的影響力に阻まれて、彼独自の政局運営を行うことができないでいた」(121/1-2)というが、宗教面でのこの大転換は、「独自の政局運営」の一つと見なしてよいのではないか。もしも彼の首都での支持基盤が「きわめて脆弱だった」(121/3-4)としても、それは独自性を発揮しようとしたレオンの施策が招いた結果なのである。
- また、ストッディオス修道院長テオドロスの書簡などに登場する「多くの高官や高位保持者」(121/2)たちはイコン崇拜派であったかもしれないが、書簡は極秘のものであり、彼らは皇帝に「反対の態度を示し」(ibid.)たわけではない。この政策の推進を阻止するような「政治的影響力」はついに発揮されなかったのである。
- (16) ともなく、この事実のみから「彼らが一致した行動を起こしうる社会的なまとまりを形成していたこと」(121/8-9)を確認するのは無理であろう。
- (17) 聖人伝史料などを頼りにして、人物同定をする大胆な試みも一部にはみられるが、実証的な研究者たちはおおむね慎重である。cf. Treadgold, *op. cit.*, p. 198.
- (18) 「比較的高い社会的背景を持って生まれたと考えるべき」(123/6-7)かどうか、慎重な議論が必要であろう。
- (19) Genesis, 23. 82-83 (史料批判の必要はあるが)。
- (20) トレッドゴールドの著書には、人物を同定する際にこの手のアクロバットな仮説が綺羅星の如くちりばめられている。
- (21) 独身の皇帝に「元老院」が再婚を強硬に勧告して同意させた話しが、「皇帝の政治的な発言力がかなり(!-中谷, 以下同様)制限されていた可能性」(127/5)を示唆するとは思えないが、ともかくも可能性にすぎない。
- (22) 小林氏はマヌエルが生っ粋の軍人であるためか、「高官・官位保持者」の中に含めていないが、高官だと考えるならば、何代にもあたり失脚しない彼の出世パターンは前述のヨハネス=ヘクサブリオスと酷似する。
- (23) 大反乱後に、しかも重大なポストに配置された人々である、「皇帝の信任の厚い人物」(129/6)であるのは当然である。
- (24) 「自分たちと出自を同じくする皇帝は、自分たちの利害を代表する存在であった」(129/19)とは、権力をめぐる厳しい現実を見ない、結果から都合よく引き出された公式にすぎない。トマスの乱ではミカエルは「テマの幹部」たちをも多く敵に回したはずである。
- (25) 史料上の初出がミカエルの治世であるから、ミカエルが「積極的に」「新たに」登用したと、言っているのであろうか。帝政期のローマなどに比べ、プロソボグラフィー・データが決定的に不足しているののである。
- (26) 「ミカエル2世はテマのストラテegosなどの地方の要職には自らと同様の社会的背景を持った人々を登用していることがわかる」(129/17-18)とは、8世紀の諸帝やレオン5世にもあてはまる一般論にすぎない。
- (27) ミカエルが「(首都の)高官や高位保持者たちに対して、強力な統制力を発揮することはついにできなかった」(130/10-11)とは、彼の再婚以外のどのような事実をもとに述べられるのか。
- (28) トレッドゴールドによれば、テオフィロスの花嫁選びはマヌエルの逃亡時期と重なっている。ともかく、マヌエルを優遇したのは、「さまざまな手段を行使してネットワークを構築しようとしていた」(135/2)といった皇帝の影響力の問題以前に、將軍との関係を回復するための措置だったのである。
- (29) Treadgold, *op. cit.*, p. 298 and n. 408 ; Bury, J. B., *A History of the Eastern Roman Empire*, London, 1912, p. 266 ; Winkelmann, *op. cit.*, S. 163, 186. なお、テオフィロスの名字はバプツィコスではなく、コンスタンティノスがそうである可能性がある(ただし諸説あって詳しい議論が必要)。また、テオドロス=クラテロスは、トレッドゴールドはヒカナイ近衛連隊長、ビュアリはブケラリオイ長官とする。クラテロスという姓または名は、ミカエルの治世の艦隊の司令官(前述)をはじめ、何人かの軍人に見られる。
- (30) cf. Herlong, M. W., *Kinship and Social Mobility in Byzantium 717-959*, PhD. Catholic Univ. in

- America, Washington D. C., 1986, pp. 109-110 ; Bury, *op. cit.*, pp. 124, 223, 271, 277 ; Winkelmann, *op. cit.*, S. 152-3. 182-183. 聖人伝史料は未見。
- (31) ビグラは中央軍を構成する近衛連隊の一つであり、単なる「宮廷内の軍勢力」(136/2)ではない。
- (32) オオリュファスを名乗る人物はこの後史料に何度も登場し、古くから様々な人物同定が試みられてきた。cf. Winkelmann, *op. cit.*, S. 117-8, 162 ; Bury, *op. cit.*, pp. 143-144.
- (33) あるいは皇帝の姉妹(Bury, *op. cit.*, p. 253 n. 3.)。
- (34) 「一時的に政権が動揺した」(136/13) 原因は、皇帝の播いた種なのであった。
- (35) 軍隊の「指導者たちは、テオフィロスが特に(!) 信頼を置く人々によって固められていた可能性が高い」(136/8-9) かもしれないが、それは当然の人事であって「可能性」の問題ではない。テオフィロスが「テマのストラテゴス(長官)などの幹部たちとも親密(!)な関係を結んでいた」(135/4) ことを証言する史料は皆無に等しい。マヌエルの逃亡やテオフォボスの不穏な動きからは、「テオフィロスは帝国のすべての軍勢力を自らの強力な(!) 影響下におくことに成功した」(136/9) とか「軍勢力は完全に(!) テオフィロスの強力な影響下にあった」(143/1-2) とはいえないだろう。テマが必ずしもミカエル2世の政権基盤とはかぎらなかつた以上、テオフィロスの政権を「テマの幹部出身者たちによって支えられた政権」(141/18) とは断定できないし、軍隊が「高官や高位保持者たちの行動を制約するのに十分な役割を果たしていた」(136/12) ことを示す明確な事実も存在しない。
- (36) 「この事件は政権維持にとって軍隊の持つ意味がきわめて(!) 大きかったことを示唆している」(136/14-15) のだろうか。
- (37) アモリオン陥落の直前、直訴を受けたテオフィロスはオブシキオン長官を鞭打っている(ThM. 154 ; LG. 222-3 ; GMC. 803-4 ; Theophanes Continuatus, 92-94)。
- (38) パトリキオスの爵位を持つ人々とか、元老院のメンバーといった場合には、当然テマの長官たちも含まれていると考えなければならない。高官たちの中から、テマの長官たちだけを取り出し、テオフィロスの政府が「小アジアのテマ幹部出身者による連合政権としての性格も色濃くもっている」(144/3-4) というのは的外れである。
- (39) 「テオフィロスが高官や高位保持者たちを完全に(!) 掌握しながら強力な指導力を発揮していることが年代記等から看取できる」(131/1) というが、実際には皇帝が彼らにどのような言葉をかけ態度を取ったのか、ほとんどわからない。
- (40) そもそも、このような巧妙な行為に若いテオフィロスはどこまで積極的に関与できたのであろうか。
- (41) Treadgold, *op. cit.*, n. 371 ; Gouillard, J., La vie d'Euthyme de Sardes (+831), *Travaux et Mémoires* 10, 1987, p. 47 (19.360), cf. pp. 9-10. n. 52.
- (42) 後の総主教となるヨハネスの一族は、当代一級の学者レオン=マテマティコスを出すなど学識に優れていたが、アルメニア系ゆえかどうかはわからないが、血筋はよくなかつたらしい。そのため彼の息子たち、マギストロスのステファノスは母親にちなんでカロマリヤスと呼ばれ、もう一人のバルダスも義父のコントミュテス姓を名乗っている。
- (43) あるいは、皇帝のインク壺長官(エピトッ=カニクレウ)。
- (44) 小林氏はこの人物を他の中央の「高官・高位保持者たち」と「異質な社会的背景を持った」(137/10) とする。なぜだろうか。論文からは、テオクティストスが宦官であったこと以外に理由を見いだせない。ならば、「宦官」は「特異な存在」(138/8) なのか。テオクティストスについては、残念ながら詳細は不明だが、8世紀と9世紀の交にエイレーネーの寵を争った宦官たちは、兄弟を皇帝に擁立しようとしたアエティオスやカッパドキアに勢力を張って蜂起したスタウラキオスであった。また、宦官でありながら軍隊を指揮した前述のテオドロス=クラテロスのような人物もいる。このように宦官が「特異な存在」でないなら、テオクティストスが「任命されたのがかなり遅いことは、彼に対する他の高官や高位保持者たちからの反発がかなり大きかったことを示唆している」(137/12-13) とか「任じられたことによって、政府内で他の高官や高位保持者たちが行使できる政治的影響力も制約されただろう」(137/10-11) という推測は根拠を失う。テオクティストスが暗殺されたのは、摂政政権を補佐して13年を経た後のことである。「異質」や「特異」の実態のより明快な説明を求めたい。
- (45) 同名の人物が8世紀末にビグラ連隊長・アルメニアコイ長官として登場し、また10世紀前半にも皇帝の娘婿として艦隊を指揮している。メリセノスなどと同じケースである。
- (46) ここには、いまだ若さが残る生身のテオフィロスの姿が描かれている。一度だけ女官と懇ろとなり、

- テオドラに問い詰められて平身低頭許しを乞うた (Theophanes Continuatus, 95), というエピソードもある。
- (47) 「自らが特に (!) 信頼を置く人物を任じている」(138/4-5) ののは、軍隊の場合と同様に当然である。「新たな人物を登用」(138/8) として注目に値する人物は、ケルソン長官のペトロナス=カマテロスくらいで、全体として「きわめて (!) 巧みな人材登用を行っている」(138/8-9) とまではいえない。
- (48) cf. Winkelmann, *op. cit.*, S. 118.
- (49) ThM. 148-149 ; LG. 215-216 ; GMC. 793 ; Theophanes Continuatus, 93-94.
- (50) Theophanes Continuatus, 88-89. また、将軍マヌエルがテオドラ一族であるならば、ミュロンは娘婿ペトロナスの伯父を讒訴したことになる。
- (51) 代父としての擬制的な血縁関係も、将軍マヌエルのケース以外には確認できず、「駆使されている」(142/1) かどうかは不明である。
- (52) 小林氏が「中央の家門」(142/2) と呼んでいる人々が具体的には誰を指すのか不明である。彼らが本当に新興勢力であるのかどうかの具体的な検証もなされていない。
- (53) もしも、テオドラの伯父のマヌエルが逃亡した将軍であるならば、彼女の一族もミカエル1世時代からの高官となる。前章で確認したように、ミカエル2世の出自の不明瞭さを放置したまま、小林氏は「テマ幹部出身の一門」は「皇帝(テオフィロス)と同様の社会的背景をもった人々」(141/17-18) だったという。しかし、テオフィロスは首都の宮廷を中心に育った軍事経験に乏しい若者であった。
- (54) 小林氏は「テオフィロスは彼に先行する皇帝(つまりミカエル2世)よりも広範な人間関係のネットワークを形成していた」(133/14-15) と述べるが、皇帝が「国政の実務に積極的に関与した(担った?)」(133/2) という点では、まず、マグナウラ宮殿で裁判を主宰した皇帝としてはニケフォロス1世やレオン5世がいた。また、テオフィロスが毎週通ったのはブラケルナイの教会だが、この道すがら皇帝が庶民の直訴に対し、皇后の弟やオプシキオン長官を公衆の面前で鞭打つという「適切な措置」(133/4) は、民衆の間には伝説となりテオフィロスの評判を高めたかもしれないが、「官僚や高官たちと積極的に関係・協議しつつ国政を執行していたことを意味する」(133/6) とは思えない。ともかく、「これほどまでに積極的に行政に関与した皇帝は帝国史上でも珍しい」(133/4-5) とは誇張であろう。彼が「高官のみならず中堅官僚たちとも親密な関係を結んでいた」(143/6-7)、この具体例は提示されていない。
- (55) したがって、テオフィロス以前の「混乱状態に終止符を打ち、帝国に再び平穏をもたらした」(115要約) 第一の要因は、英明な君主の登場ではない。
- (56) 例えば、『オクスフォード・ビザンティン事典』の項目を参照。「テオクティストス暗殺において、暗殺参加者が中央行政機構の要職にあった者たちや高位保持者であったことは象徴的な事例である」(63/5-6) というが、テオクティストスの10年以上におよぶ政権の保持を小林氏はどう見るのだろうか。
- (57) 彼らは「ミカエル3世やバルダスの政権獲得に伴って高い爵位や官位を得たわけではない」(62/9-10) わけではない。
- (58) ともなく、「家門意識がかなり強いものとなっていたことが看取できる」(62/17-18) わけではない。さらに、史料に「『全てのアルコン(役人)やストラテegos(テマ長官)たち』がバルダスに忠実であった」とあるから、「当時の高官たちがバルダスやミカエル3世たちと一体になって広範な社会的結合を形成していたことを示している」(63/2-4) と言っているのだろうか。果たして、「相互に親族関係のネットワークを張りめぐらした、巨大な社会的結合と化していた」(72/3) のか。バルダス是一部の(文武)高官たちによって殺害されたのであり、そのメンバーの中にはバンレイオスと彼の親族だけでなく、彼の娘婿や皇帝ミカエルその人など多くの人々が含まれていた。けれども「親族ネットワークに直接つながりのなかった人々も、バルダスやミカエル3世と対立していたわけではない」(63/1-2) となるのだろうか。
- (59) このことと「ミカエル3世は叔父のバルダスや、コンスタンティノーブル総大主教のフォティオスらとともに政治を行っていることが確認できる」(147/4-5) という表現とはどのような結び付きなのか。「彼らはテオフィロスによって皇帝一門に組み込まれた人々である」(ibid.) という説明だけでは不十分である。
- (60) ミカエルを強く支持していたらいい人物も確認できるが、「従者団」の中ではない：ニケタス=オオリ

ュファス、コンスタンティノス=ミュイアレスなど。だとすると、小林氏のいう「従者団」とは、どの程度の結束力を保持し、どれくらい信用がある集団や人々だったのだろうか。「ミカエル論文」前半部で展開される、ベックの「従者団」説批判は堅実であるが、これは基本的にはヴィンケルマンによって考察済みの事柄である (Winkelmann, *op. cit.*, S. 79-94) だけに、より明確な「従者団」論を期待したい。

- (61) 上述の点とも関連するが、ミカエルの「従者団」と「社会的結合」(57-66)とはどのようにに関連するのであろうか。高官たちが「一つの社会集団」(63/11)であるから、ミカエルとの個々の「人的結合」も「社会的結合」となるのだろうか。また、ミカエルが「他の政治の問題についても、彼らと協議を行ったり、彼らに別に任務を与えて利用していたであろう」(47/11-12)という推測は、いつの、どのような内容の政治活動によって示唆されるのか。総主教イグナティオスへのパロディも、若い皇帝(18才以下)のただの余興でなかったと言い切れるだろうか。ともかく、小林論文では、ミカエルが「きわめて巧みな(!)高官層対策を行な」(67/8)っていたことは検証されていない。ミカエルのバルダスへの信頼は厚かったにせよ、最後には皇帝は彼の暗殺を支持したのである。
- (62) 一部の史料がミカエルを否定的に描いていることは学界の通説となつてはいるが、そのことがただちに彼の優れた君主としての存在を約束するわけではない。「ミカエル3世の行動は当時の支配構造を良く理解した、合理的なものだった」(72/19-73/1)のだろうか。もしも答えが逆であるならば、「ミカエル3世と高官層の関係の良さ」(69/5)や、「ミカエル3世の親政期には起きなかった、高官層による陰謀が(パシレイオス1世の治世には)多発している」(68/17)理由もはっきりするのだが。
- (63) 「彼が行政機構に関係する役職ではなく、皇帝の身边にいて皇帝の世話をする、家産機構的性格の強い役職を歴任している」(50/15-16)、「家産機構的性格の強い役職」(18-19)という表現は、後の小括部では単に「家産機構内に位置を占め」(57/9)と変化しているが、元首政期ローマのような、皇帝家に付随した家産機構はこの時代には未確認である。なお、ビグラ近衛連隊長はれっきとした武官の要職であり、「家産機構的性格の強い役職」(ibid.)とするのは一面的である。
- (64) このような急激な出世は、社会的流動性に比較的富んでいたとされるビザンツ帝国にあっても、やはり例外的な出来事に属している。
- (65) トラケンオイやオプシキオンの軍事力を利用しようとした、バルダスの娘婿シュンバティオスたちはあっけなく捕らえられた。cf. Bury, *op. cit.*, pp. 176-177.
- (66) ミカエル3世の治世初の状況を示す宮中宴会席次リスト、ふつう「タクティコン」と呼ばれる官職表も文官と武官を特に区別していない。
- (67) テマ長官たちが、「地方」にどのような経済的基盤を有していたのかを示す史料も乏しい。7・8世紀の地方の富裕者たちの多くが「政治には興味や関係(心?)を抱いていなかった」(54/6-7)ことの例として、小林氏は聖フィラレトスを挙げているが、彼の孫娘が皇后となったのは単なる偶然なのだろうか。なお、近著の Ludwig, C., *Sonderformen byzantinischer Hagiographie und ihr hellenistisches Vorbild*, (Berliner Byzantinische Studien 3), Frankfurt a. M. では、『聖フィロテオス伝』などが伝える事実の信憑性が批判されているという。
- (68) ペロポネソスの富豪、ダネリス未亡人の事例は、中央の人々が地方の有力者たちに「経済的援助などを期待していた」(54/14)ことを示しているのだろうか。
- (69) 言うまでもないが、以上の結論はあくまでも本稿の考察からの推論にすぎない。

(1997年4月30日受理)